

會



報

1959年3月

202

日本山岳會

冬期登山について
の注意

日本山岳會

冬山の季節に入ってから、慶応大学山岳部の中岳附近の雪崩による遭難に引き続き北大岳部の十勝岳の遭難、東海大学山岳部の八ヶ岳の遭難、富士山の遭難、早大山岳部の穂高神岳の遭難と、一週間足らずの間に五つの遭難事故が続いた。

前途有為の青年の生命を一朝にして失ったことは、その遺族の方方にとつては勿論のこと、われわれとしてもまことに残念の極みである。山男が山で死ねば本望だと良くいい、かつまた良くいわれて

るが、これが果して本望のことなのだろうかと思わざるを得ない。同じ山の仲間や先輩や肉親に心配をかけかつ悲しみを味あわせ、全く関係のない地元の人々に迷惑をかけるということも考えない、独り良がりの言葉だといわれても、一言もないことだろう。

特に捜査救出に協力して下さる地元の方々や地元の警察の方々の努力に対しては、言葉ではいい現わせないものがある。眼に見えないそれらの経費も度重なる莫大なものとなる。この度の連続遭難事故に対して警察庁では特に遭難

防止について何らかの方法で登山者に対して、注意を喚起し未然に防止する手段を講ぜられぬものかと相談があつた。勿論おのおのの山岳会や山岳部には監督もあり、リーダーもあり、先輩もあつて、冬山の計画には、慎重を期していると思うが暮から正月にかけての冬山のシーズンを前にして、更に登山者各位に注意をし遭難防止に協力していただくべく存じることである。

注意事項

①初冬の山 日本の冬山といつても、十二月から四月頃までをいうが、新雪が根雪となる十二月から一月にかけての冬山が一番不安定な雪の状態であり、かつ天候が悪い。登山者の心がまえも、厳しい冬山だというよりも、秋から冬への切変え位に考える向きがある。そこに山に対する態度に慎重さが欠けてはいないか。

安易な単純な山の見方をしていて、安易な単純な山の見方をしていて、積つた二月、三月の山の方が取り組むのには楽ではないかと考えられる。登山者の冬山に対する順応性も出てきているのではないかと考えられる。今度の五件もこの点に疑問はなかつた。今年の穂高の雪の状態と昨年、または一昨年とは異なるはずで、毎年同じような雪の状態ではない。

②雪崩 積雪期に山に入る以上雪崩の危険はつきものである。新雪が積る初冬の山では、時により雨もあり、下層の雪質と、上層の雪質が異なり、登山者の踏み出した足

跡や、スキーマのシュプールによつて、ショックを受けて崩れて雪崩になる場合もある。また三日も降り続く新雪が、晴れた日に太陽の熱のためにバランスを失つて崩れて雪崩となる場合もある。富士山の遭難の時には、尾根を乗り越えて雪崩が出た。昔から「音もなく降る雪は雪崩を起し易い」という名言句があるように、これまでの雪崩の事故の大部分は降雪中行動してやられていた。また降雪の止んだ翌日の行動についても慎重を期さなければならぬ。特に谷においては絶対に注意が必要である。

③気象 ラジオの天気予報に注意し冬型の気象配置を考え翌日の行動の重大な参考とすること。冬山ではおおよそ午前中はよくても、午後になると小雪や曇る場合が多くかつ快晴の日はありません。普通だ。

④山の装備 或る山の先輩が装備が多すぎる、といつていたが、あまりにも必要ない用具は持つていかぬことだ。夏の山と異なり体力の消耗は凍死に直結することがある。他人のまねことをしたいために大きなリュックサックを背にして山に行こうなどというのは愚の骨頂といわねばなるまい。

⑤リーダー 年功でリーダーになる場合もある。本物リーダーとは

⑥計画 マナスルの成功から刺激された巷間にいふ伝えられる位の登山ブームであるそうだが、昔の登山者が行つたから案外楽だと考えたり、あの連中があのルートに登るのなら、自分等はこのルートだと考えるのは間違ひのものとだ。自分等の力に相応した山を選ぶことである。計画だけが先走つてしまつてはいないかと反省してほしい。

⑦入山の時 遭難が頻発するので警察庁並に地元では登山者に先立つて、地元警察署(派出所)に登山の計画と登山者の名簿を提出してほしいという要望があるが、万が一のこともあるから、是非とも自分達の行動範囲が分るような計画を駅の派出所にでも提出してほしいと考える。これは登山が警官に監視されているのだという狭い考え方をなくして、警察関係者も自分達の登山に協力してくれるのだと解釈してほしいと考える。このことは地元の方々に對する務めだと考えて実行してほしい。

⑧退却の光榮 突進だけが山登りではない。光榮ある退却は、再出発の第一歩であることはリーダーは勿論各人も良く理解していただければならぬ。山登り一回で勝負するものではない。「牛歩良く駿馬を追う」という、ねばりとしつ

こさ、慎重さをもつことである。
初めて冬山に行く人々
 ① 最初から一段飛躍した冬山に行かぬこと。初めはスキーで中級の山に登り、雪に馴れ、雪の性質を味わうことだ。いきなり、冬の穂高に行こうなどは考えないことだ。学校山岳部または一流山岳会でも一度このことは考慮すべきではないか。

② 体力を練えておくことである。経験者においても当然のことだ。幾日か降り込められ、その後急激に重労働のような登はんが始まる。頑丈な者でもこたえる登はんだから、それに耐え得られる体力がなければ落伍する。

③ 他人がやつたから自分もやるという、人まねの山登りをしないことだ。自分自身のペースに合致した山登りを念願することである。

④ 先人の山の記録や、雪山の注意事項を良くかみしめて読み、自分のものにして置くことである。リーダーについて行けば山に登れると考えてはいけない。

⑤ 危険に直面しても、あわてて自分を失ってはいけない。冷静に判断し生きている自分を強く主張し、あきらめてはいけない。

⑥ 練習場だけで楽しむスキーは危険は少ないが、山に登ろうとする者は、天候が急変したり、あるいは急変しそふたりたりしたら、中途で引き返さずことである。山頂で、帰りの途を失い、迷って遭難することがある。独りで山に登る時には、ルートをよく知っている人と一緒に行くことである。

る。道に迷つたら、体力を消耗させず、あわてずに雪が止むまで、または道がはつきり見定められる時間を待つて、行動に移ることである。

(附記) 本稿は冬山遭難事故のひん発にかんがみ、本会々長名において、昭和三十三年十二月二十五日関係各方面に配布したパンフレットである。

今冬の遭難事故

山崎 安治

今シーズンの冬山はいたましい遭難事故が続発した。日本で冬の山が本格的に登りはじめられてからすでに四十年になるが、その登山の歴史の中で、今年ほどひどい事故が続出したことはない。意味で注目すべき点である。

これら学生の遭難に対して現在の学生の登山というものに全く理解を持たない人々から、全く見当がたい批判も受けた。しかし、なお遺体も未発見のところがあり、それら局外者の声に対しては、いちお答えは出来かねているのが現状である。ただそれぞれ事故をおこした学校の部内においては厳密な検討が重ねられ、その事故の原因について目下反省がおこわれている段階であり、いずれ時をみてその結果は何らかの形で発表されるものと思われる。次に今冬の遭難事故の概要について略記し

ておく。

◆昭和三十三年十二月十三日午前十一時ごろ慶大山岳部一行八名(リーダー八銀貞悦君)が北アルプス中岳の南岳側傾斜面の稜線で雪崩発生中、そのショックで板状雪崩が発生、平塚泰一郎、早川節雄、吉沢誠敏、酒井信男の四君が雪崩にうまり死亡した。一行は十二月八日上高地に入り槍沢をへて槍から奥穂高を往復する計画であった。

◆十二月二十一日午前七時ごろ東海大学山岳部十名の一行(リーダー米持米蔵君)が八ヶ岳登山中硫黄岳と赤岳の中間にある石室附近で米持リーダー、野沢賢、姜栄仁の三君が凍死した。

◆十二月二十一日北海道十勝岳山麓勝岳荘で合宿中の北大山岳部小竹幸男、加藤幹夫、西安信の三君は第一班として十勝岳頂上に向いひるごろ頂上に登った後、十勝岳、上ホロカマツク山間の稜線上で吹雪のため行方不明となった。

◆十二月二十二日ひるごろ穂高岳明神岳東稜を登攀中の早大山岳部員五名(リーダー成川隆顕君)は東稜馬の背のピーク下約二七〇〇米附近で雪崩にあい加藤勝重、川村浩之、古川竜祐、中村領吉郎の四君が下又白側に転落、行方不明となった。

◆十二月二十二日午前十一時二十分ごろ富士山吉田口八合目を登っていた千葉水道局員三橋一夫、三菱銀行員萩原勇司の二君は強風のためスリップ六合目まで落ち死亡した。

高瀬沢穂高小舎下の斜面で日本大学山岳部菊地富雄、中村達男、菅原省司の三君が穂高小舎下附近から落下してきた雪崩のため流され菊地、中村の両君が行方不明となった。

◆十二月三十日午後六時ごろ福島県家形山ヒュッテ上方五百米の地点で幅三十米、長さ百米の雪崩がおこり、吾妻山縦走中の吾妻山の会一行七名のうち六名がまきこまれ佐藤信雄君が死した。

◆昭和三十四年一月二日午後二時四十分ごろ南アルプス北岳バットレス附近で東京千代田区中川金属社員上兼加積君ら一行四名が登山中雪崩にあい上兼君が行方不明となった。

◆一月七日ひるごろ後立山鹿島槍登山中の中央大学山岳部員合田雄一君は八峰クレット附近で雪底をふみはずしかクネ里に転落、行方不明となった。

◆一月八日午後二時ごろ鳥取県南高松山岳部遠藤正人君をリーダーとする精山光美、高橋克嘉、伊奈豊昌の四君は大山の剣ヶ峰と天狗ヶ峰間の縦走路で凍死体となり捜索隊に見えられた。

◆一月七日帰京する予定で北穂高から槍ヶ岳縦走に出発した徒歩溪流会員佐藤金吾、保坂博の両君は北穂附近で行方不明となった(附記)以上新聞報道によったものもあるため若干の誤りがあるかも知れない。念のため。

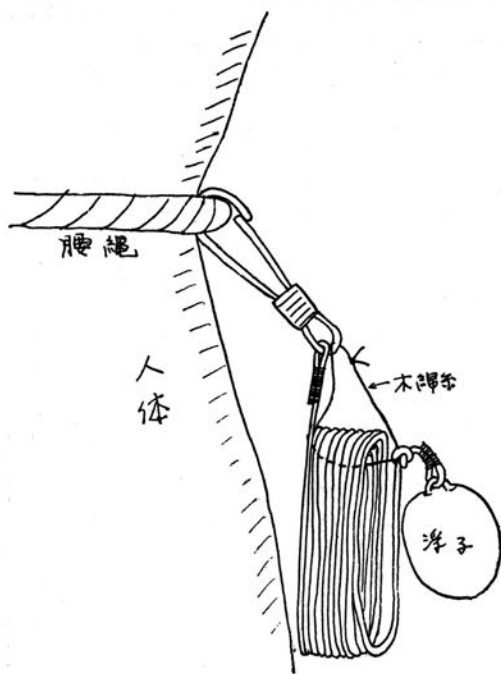
雪崩紐に関する一考案

藤原康明

従来、雪崩紐というものは「雪崩の発生の可能性の大きな箇所において約三〇メートルの長い紐をひきずって歩く」というように使用してきた。しかし現実においても、雪崩の発生の可能性があるものの判断は各人によつて差があるもので、また「ここからは紐をひきずっていい」という決断はなかなか下しにくく、もし、ひきずって歩いても、その紐のためにアイゼンを引かけたり、かえつて雪崩が発生することも考えられないことは無い。

そこで考えられるのは、従来のように紐をひきずって歩くのではなく、体に紐をひきずる、万が一、雪崩に流された場合、自動的に紐が外にのびるしかけをする方法である。

原理は次の通りである。非常に軽い紐の先端に雪崩中の雪の比重より小さい比重の物体をつけ、他端を人体に固定し、その中間の紐をまるめて、何か切れやすい糸かまたは紙で結び、常に腰にぶらさげておく。万一雪崩に流された場合、人体の動きと雪の摩擦とで紐を結んだ糸または紙が切れ、紐のひいてその先端の雪より軽い物体が雪面上に浮び出る可能性を作つて、少しでも早く人体の発見を早め、助けようとするものである。雪崩紐は次の四つの部分からな



る。

①浮子 ②紐 ③着脱箇所 ④離散装置

次にその各部分の必要条件を列挙する。

①浮子

色……雪面上において遠くからでも良く見えること。深さの浅い雪中の場合、太陽熱を良く吸収すること。

形……流動中の摩擦が少く、浮上りやすいこと。雪上で見つかりやすいこと。

大きさ……携帯に便利でかつ雪上で見つかりやすいこと。

比重……雪崩中の雪の比重○・五〇・五より小なること。

強度……形のくづれない程度。

その他……水分を含まないこと。目印となるべき名

前等が記入出来ること。

②紐

色……雪面上において遠くからでも良く見えること。深さの浅い雪中の場合、太陽熱を良く吸収すること。

長さ……雪面上に出る可能性が出来るだけ大であること。長い程良い。

重量……携帯に便利なこと。

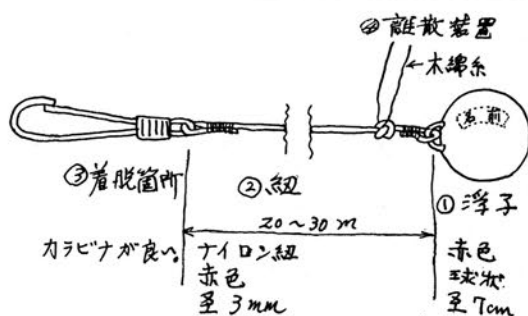
比重……出来るかぎり小なること。

強度……出来るかぎり大であること。

③着脱箇所

形態……絶対に体から離れないこと。かつ着脱が簡単に出来ること。

④離散装置



形……流された瞬間に自動的に離散できること。かつ人為的にも出来ること。

等々で、大切な点は人体が流されている間に、浮子、紐が離散装置で人体から離れて雪面上に現われることである。

まず、浮子が人体から確実に離れることだが、雪崩にやられる時は人為的に離すひまなどはないから、それは自動的に行われるものでなければならぬ。その装置は前述のように、切れやすい糸、紙（これは勿論、普段の行動中には切れない程度のもの）で結ぶ替りに、バネ、火薬等によつて機械的装置にすれば、より効果的と思われる。浮子は人体から、ただ離れさえすれば良いのであつて、必ずしも火薬等によつて遠くへ飛ぶ必要はないと思う。というのは、人

体と浮子とは比重などの差から流れる速度も異つて、自然、両者が離れるということが考えられるからである。次に、人体から離れた浮子は流動中に必ず雪面上に現われるはずである。しかしこの浮子には比重の大きな紐（繊維で一番比重の小さいナイロンでも一・四）がついていて、雪崩の流れは水の流れと違うから、このようにうまくいかないかも知れない。しかし、従来のただ紐を流すだけのものより効果が無いことはないと思う。

次に、紐は何かのひょうしに雪面上に出ることも考えられるから、出来るだけ比重の小さいもの、そして途中で切れてしまつては意味が無いので、出来るだけ丈夫なもの、紐の人体との着脱箇所、すなわち連結方法をどうするかということも大切である。というのは雪崩紐は流されている間に、体からほどけてしまつては意味がない。だからといつて確実に結んでしまつた場合の危険も考えられるから着脱が簡単でなくてはいならない。その危険とは、万一雪崩に流された場合、幸い雪面上に体が出て停止したとき、次の雪崩をさけるためにも、すぐ避難しなければならぬ。しかし雪崩紐が確実に結んであつて解くことが出来ない時、強い紐（ナイロン等）を切ることは、ピッケルでも無いがかり不可能だと思ふ。（紐は長きのびて、雪の中に固定されてし

まうだらうし、ピッケルなどは失つてしまふだらうから）

以上の四部分の必要条件を満足する雪崩紐であるならば、その物は何でも良いと思ふ一例を圖に書いた。

なお、この案は臆測にすぎず、実際にこうなるかどうかは、勿論、人体実験は出来ないから、今後何らかの方法で実験するのは興味あることだと思ふ。

最後に、この雪崩紐は今まで通れなかつたような危険な所を通れるようにとか、また少しぐらいの判断が間違つても良いようにと付けるのでは全く無い。本当に一万分の一ぐらゐに起る不慮の雪崩のために、一人でも命が助かればという考えで考案したものである。

この案に対して、皆様の御批判、御教示をお願いする。

(一九五四・一・一〇)

山岳五十三年予告

山岳五十三年は四月下旬発行を目標に準備を進めております。主な内容は次のとおりです。

アレナレス初登頂（神戸大山岳部）スワート・ヒマラヤ探検行（松下進）ジュガル・ヒマールからランタン・ヒマールへ（深田久弥）八千米峰登攀のタクティクス（松田雄一）AC百年祭（松方三郎）三十年のスイス（積有恒）富士山の雪崩遭難（金坂一郎）積雪期の黒部下横断（大阪大学山岳部）積雪期の剣岳附近（同志社大山岳部）追悼高頭仁兵衛氏、岡野金次郎氏、松尾清秀氏、各山岳部の記録、会務報告。A五版、約一七〇頁、（編集担当田島汎、望月達夫、山崎安治）

ヒマルチユリは、私たちが一九五四年にルビナ・パスを越えてその東面を探つたときは登れそうなるルートが見つからなかつたし、ティルマンやケニア隊が探つた南面も絶壁で手がつけられなかつた。マナスルにつづく山稜も不可能である。

残された東北面はこの秋先遣隊によつて踏査され、はじめて主峰に近づき得るルートが発見されたが、主峰の基部に達するまでには疑問が残されている。

ランの谷を経てヒマルチュリ東尾根に出、主峰基部との中間に前進基地を設けるまでを第一段階、そこから主峰基部に達するまでを第二段階と考えている。ここまでの五カ所に前進キャンプを設ける予定であるが、そこから頂上まで約五百米の氷と岩の壁を一気に登り

ヒマルチュ
リへの出発

村木潤次郎

れが第三段階である。

だいたいベース・キャンプから登頂完了までを約四十六日とみて詳細な行動計画が立案されている。登頂の時期を五月中旬の一週間と予定しているが、天候が悪い場合は十日間ぐらいに待機するつ

もりである。

日本の登山界もマナスル登頂以來八千米級の巨峰に登り得る力を持つようになったと考えられてはいるが、ヒマラチュリのように八千米にとどきそうな高所で、しかも高度の技術を發揮して氷と岩を登らなければならぬ場合は、その力は全く未知数といつてもよい。山のむずかしさ、地元民との交渉など心配すべききがないのが、私は仲間力を信頼してゐる。

従来のヒマラヤ登山隊にくらべて荷物を極力軽くして行動性を増していること、経費も極度に切りつめていることも特徴であるが、なによりも平均二十八才という若さが特色といえる。この若さがヒマラヤの激烈な環境の中でどれだけ活躍できるか、私は大いに期待している。

ギリョーネと
アマダブラム

松田雄一

去る十一月十二日付カトマンズ発のUPI電は六人よりなる英伊合同登山隊(Anglo Italian Expedition)が十月二十日エヴェレスト山群の峻峰アマダブラム(Ama Dablam 22,500 ft.)の山麓一六〇〇呎の地点にベース・キャンプを設置し、同峰の攻撃にとりかかったことを報じてきた。この登山隊のリーダーはエヴェレスト一九五三年のA・グレゴリーで、隊

の構成を見ると英國側四名、イタリア側二名よりなつてゐる。英國側はグレゴリーと同郷であり、グラスゴウに住むリチャード・クックとジョン・カニンガム、並にウエスレイのシリル・レビン、イタリア側はアピ登山で有名なミラノ大学地質教授のピエロ・ギリョーネと、同じくミラノ在住のギューゼッペ・ピロヴァーノの二名である。シエルパはカンジンのサードであったダワ・テンジンをサードとする六名で、二月月にわたりアマダブラム峰周辺を偵察し、もしアマダブラム峰がどうしても不可能という場合には、附近の他のピークを登頂する計画であつた。彼等は九月二十日にロンドンを出

発した英國隊員とチューリッヒで
 落合い、ネパールへ向つたが、ポ
 スト・モンスール山の向うには
 一寸遲すぎる感じがする。ところ
 でこの隊員の中に当年七十五才の
 ギリョーネが参加しているという
 ことは一寸した驚きである。彼は
 おそらく、ヒマラヤの現役として
 は自他共に最年長者であらう。一
 九五四年アビ峰に隊長として三人
 のメンバーを率いて向い、全隊員
 を失ひ悲劇の隊長、傷心の老隊長
 とさわがれたことは会報七十五号
 に吉沢一郎氏が書いておられる
 が、当時七十一才だから今年は七
 十五才。会報二〇〇号の日高会長
 による「イタリヤ山岳会の近況」
 の会員の登山の項にも、「ギリョー

ネ氏・コーコンピア・アンドス（一九五七中に新登または単独登攀三回）、一九五八年中に新登攀二十一回）ギリョーネ及びグレゴリー・両氏デイスティギルへ」と全くすさまじい山行を続けている。この老人とグレゴリーが何時どこで邂逅し、その後ずっと一緒に山登りをつづけているのかは知る由もないが、昨年も今年のようにグレゴリー隊にギリョーネはただ一人のイタリア人として参加している。ここでこのデイスティギル・サル遠征について、今まで余り知られていないので書いてみることにする。

この遠征隊はA・グレゴリーのリーダーシップのもとに、ギリョーネと他の四人の英国人、David Briggs, Dennis Davis, David Briggis, Dennis Davis, John Cunningham, Keith Warburton よりなつてゐた。一行は一九五七年の五、六、七月はわたりカラコラムのデイスティギル・サールの偵察に向い、B・Cは南壁の基部一五、〇〇〇呎に建設した。数日の偵察の後、一行は頂上の西コルへ南側から達することの可能な一つのルートを発見した。登攀は急斜面の壁であり、行動は悪天と危険面の状態のために中断された。な雪の状態のために中断された。雪崩の危険はルート上何処にもあつた。そしてついに第一キャンプは雪崩に破壊された、幸いなことは雪崩に破壊された、幸いなことは無人の時であつた。一行はこうした危険に遭いながらも着々と荷物を上げをたづね山上に四カ所のキャンプを進めてちようど二二、〇〇〇呎の下まで達したが、悪天と危険な雪の状態は好転せず引返さざる

この遠征隊はA・グレゴリーのリーダーシップのもとに、ギリョーネと他の四人の英国人、David Briggs, Dennis Davis, David Briggs, Dennis Davis, John Cun-

ningham, Keith Warburton 一行は一九五七年の五、六、七月はわたりカラコラムのデイスティギル・サールの偵察に向い、B・Cは南壁の基部一五、〇〇〇呎に建設した。数日の偵察の後、一行は頂上の西コルへ南側から達することの可能な一つのルートを発見した。登攀は急斜面の壁であり、行動は悪天と危険な雪の状態のために中断された。

るを得なかつた。一行が二カ月間に滞在した間に天氣の良い日は八日しかなかつた。その上この地方にはポーターに経験のあるものがいないので、高所キャンプへの荷物は、すべて隊員の肩で運ばねばならなかつた。

大体以上の通りであるが、私はこの機会にこのヒマラヤの老登山家の健康を折つて止まない。

(iii) • iii • iH)

〔追記〕

マンズ通信によれば、アマダブラム峰はどの面も急峻にして遂に登りえずに終つたらしい。しかしながら来年のブレンスーンには別の英國隊が更にこの山を試みるためにネパール政府より許可をとつてゐるらしい。

一方デイスティギル・サールの方は、われわれの目標はマルチュリより二十一米程高い山であるが、一九五八年にマイク・バンクス大尉の隊が向うことになつてゐるが、途中でラカボシに方向を変へてしまい、今年也未登に終つた。しかし近着のラワルピンディ発の外電によればランペールを隊長とする七人よりなる強力なスイスの登山隊にたいしパキスタン政府はデイスティギル・サールの登山許可を出したことが報じられてゐる。雪の状態さえよければ来年こそその山も登られてしまうのではなからうか？

(三三・一一・二〇)

会費をお納め下さい 会費未納の方が大分あり、会の運営にも支障を来しますので、至急お納め下さるようお願い致します。

イギリス隊の
カフカズ登山

望月 達夫

一九五八年七月に九人からなるイギリスの登山隊が、ソ連邦の特別の許可をえてカフカズの山で約四週間をおくつたことは、この山城が二十年このかた自由国家の登山家にとざされていただけに、まことに興味深いニュースであり、また世界の登山界にとつても朗報と言えよう。

この隊は Sin John Hunt を隊長とし Alan Blackshaw, George Band, Derek Bull, David Thomas, Christopher Brasher, John Neill, Michael Harris, Ralph Jones の九人からなりたつた。

一行はまずウシユバ及びエルブルズに近いシーエルダ川とバクサン川の合流点付近の固定キャンプを根拠地とし、計画の後半に企てるべきバズインギ氷河からの登山の訓練と準備とに、この期間の目的をおいた。悪天候に災いされたが、ピク・カフカズ(四〇四八米)とピク・シユチュロウスキー(四二〇〇米)に登頂した。

ついで八日分の食糧を携行し、困難なウシユバのアイスフォールを乗り越えて、ウシユバ北峰下のプラトール上四〇〇〇米の地点に根拠地を設けた。そしてウシユバの双峰を北方からと南方からの二パティで横断を企図したが、七月七日から十二日まで殆んど止む間

なく雪が降つたため、十一日の朝にはウシユバ・プラトールの新雪は一メートル以上に達し、しかし天候は依然回復せず、登山は全く問題外となつてしまった。ここで計画の前半が終つた。

一行はつぎにベズインギ地域に移動した。七月十四日、ベースキャンプは高度二三〇〇〇米のロシア人の大キャンプの近くに建てられた。そこはベズインギ氷河の舌端に近く、ベズインギの流れとミシルギの流れの合流点でもあつた。つづく十二日間には幾つかのパーティに分れて次のような登山を行つた。

①七月十五・二十日 バンド、バル、ハリス、クツオウスキーの隊は北バットレス(ミューラー・ルート)を経てシユカラ(五二〇〇米)の第三登。このルートの第二登はヴィタリ・アバリーコフに率いられたソ連パーティが行つた。(ソ連での困難度五級A)。

②七月十五・十九日 ブラックシヨ、ハント、ジョーンズ、ブレイヤリーの隊はジャンギ・タウ(五〇五一米)のシユワルツグリューパー助役を経てベズインギ・ウオーレルの第二登。

③七月十五・十八日 ネイルとギンギ・タウの頂から約二〇〇米下方まで達し、前途には技術的困難もなさそうに見えたが雪の状態が余り危険なので登頂を思いとどまつた。彼らは途中ピバークを重ねて同じルートを下つた。このルートはソ連で四級B・五級A。

ツペンロイターによつてゲストラ(四八五九米)に登頂。トーマスは同行したが絶頂下でとどまつた。

④七月二十二・二十七日 バンドとハリスによつて東峰へまづ直ぐにつき上げる南バットレスを経てデイク・タウ(五一九八米)の初登。

一行は主峰に至りさらに北尾根を下つた。このルートは五級Bでソ連では最困難の等級である。同期間にハント、ブラックシヨ、ギツペンロイター、ブレイヤリーはマンマリール・ルート(南西尾根)からデイク・タウを試みたが、約四五〇〇米付近で一行中の一人が不調におち入つたため、登山を放棄した。

イギリスのパーティはソ連領内に滞在中全期間を通じて、ソ連登山家から十二回の協力を受け、また非常に親切に遇せられた。そして登山の方法とか装備用具などに關しても、両国の登山家の間で意見の交換が行われた。またソ連登山家の二、三の者はイギリスのパーティと登山を共にしたのだつた。

ヒマラヤン・ニュース

◆アマ・ダブラム(六八二七米)に昨年秋挑んだアルフレッド・ゴレグロイ氏を隊長とする英国、イタリア合同登山隊は、登高の最終段階が極めてむづかしかつたこと、悪天候、偵察不十分などのために失敗した。一九五九年五月にはエムリン・ジョーズ氏を隊長とする英国隊が再度登山を試みる。◆フランスのクロード・コガン夫

人を隊長とする七名の婦人登山隊がこの春チヨール・オユー(八一五三米)に登頂を試みる。一行はフランス人二名、イギリス人三名、スイス、ベルギー各一名の女子ばかりの登山隊である。

◆ネパール政府は明一九六〇年インド登山隊にエヴェレスト登山許可を与え、また本年はその偵察ならびにブモリ(七〇六八米)の登山許可を与えた。

◆オーストリア山岳会はヒマラヤの未踏峰では世界最高のダラウギリ(八一七二米)に登山隊を派遣することになり、二月下旬出発した。登山隊は一九五六年ガツンシャール第二峰に登頂したフリッツ・モラビツク氏が隊長で医師一名を含む六名の隊員からなつてゐる。(山崎)

パタゴニアへの
新遠征計画

昨年十二月二十二日、ブエノスアイレスからのUPI電によれば、イタリア、アルゼンチン合同登山隊が、チリとの国境に近いパタゴニア・アンデスの未踏峰(Torrey Peak 6,128m)へ向うことが報じられている。この登山隊はアルゼンチン在住の二八才のイタリアのアルビニスト、フオールコロ・ドロ・アルビニストをリーダーとし、隊員は、彼の弟のヴィトリオ・ド・ロアルタン、一九五八年のガツンシャール三峰へ遠征経験を持つアルター・ボナッティ、カルロ・マウリの兩名及び、カルロ・ボタツズオ、レネ・エグマンと数人のアルゼンチン・ラクイマーより

編成される。登山隊は一九五九年の一月末にトリエ峰の山麓に達し、二月の初旬に登頂を行う。チリ側の日本との合同計画に対し、アルゼンチン側のイタリアとの合同計画は、最近におけるこの方面の一つの傾向を示すものといえよう(三三・一二・二五)(松田)

東京支部便り

八子ヶ峰スキー
講習会

A級「もつと前傾して」安彦先生のお声に、あわてて姿勢を正そうとする、とたん、スッテン。スキーを穿いてやつと一週間目の私にとつて講習会は今度が初めて。直滑降、斜滑降、ボーゲン、これだけは一応滑れると思つていた私なのに、先生の御注意をきくと、どれもこれも、足先だけでいい加減にやつていたのじやないかしらと、初めの中、悲しくなつてしまつた。エツチラオツチラ登つては滑り、ころんでは滑つた毎日、スキーでこんなに重労働をしたのも私にとつて初めて。午後の疲れた目に、サツと雲が晴れて夕日に輝いていた蓼科山、車山等、南信州の山々の美しかつたこと。四日間の講習で、今まで気もつかなくなつた。目の位置ストックの位置等の大切なことを知り、また先生や皆様の美しいフォームを見て、いい経験になつたと思う。帰りのバスにゆられながらいつかは私も、美しいシユパールを銀世界に描くことが出来るだろうと、楽しい想像

をして、一層、スキーが好きになつていた。(北原春子)

B級 今回の八子ヶ峯スキー講習会に参加して感じたことを述べさせていだきます。とかく休日には乗物が混雑し不愉快な思いをしますが、今回は最初より貸切バスが、この点大変気持よく目的地に着きました。私はBクラスに席を置きましたが、学生時代にちよつと滑べただけで昨年は殆んどブランクの状態でした。そして今年こそと思つて矢先に今回の講習会、大変意義がありました。直滑降からボーゲンまで、本当の初歩の部門ではありましたが、これ程厳格に、規則的に、詳しく、そして愉快に御指導戴いたことは今まで経験したことがありませんでした。今まで我流で滑つていた私には開眼された思いが致しました。雪質も良く、スキー場特有の騒々しさもなく、楽しく四日間を過ごしましたことを心より感謝しております。今後このような会にぜひ参加させていただきたく、今回種々御指導賜つた安彦先生初め、講師の方々に厚く御礼申し上げます。(和田肇)

C級 上級中級の方々がスキーをつけて頻々と去られた後、私共九人の始めてスキーを始める人々が佐藤講師のもとに残つて、スキーの名称、スキー、ストックの左右の見分け方から教へて頂き、まず歩き方から始め、初日は正しい直滑降でしたが、スタートから目標を定められても到着地はさまざまといった具合。

集つて下さい。下の方の人は早く登つて、上の方の人はスキー

をぬいで来て下さい」と、初級ならでは聞けない急ぎの集会もありました。「29番、お尻が出ていましたね」といわれ、ゼッケンに馴れていない私共は「そうですね」と人ごとのような返事をしてから、ハッとした顔をして、わがことと気付いて、ニヤニヤしている人もいました。とも角初日は夢中でこんなことも夜部屋で語り合つて始めて気がつき笑い合つたものでした。こんな私共も四日目の晴天に、今までの総ざらいに中級の方々の隣で得意になつて、ボーゲンらしきことが出来るようになりまし。相惜直接の教を他の講師の方から受けることは出来ませんでしたが、手の届かなかつたクリスチャニヤ・パラレルを佐藤講師の美しいフォームに魅せられ忘れぬうちにまた出かけたなど、すっかりスキーのとりこになつて名残り惜しく八子ヶ峯を後にしました。(小原晴子)

スキー講習会を終えて

安彦 六郎

今回のスキー講習会は、東京支部がスキーをとりあげてから二年目の講習会である。もつとも、それ以前に「富士桜とスキーを楽しむ会」というのを三、四回毎年四月下旬に行つたことはあるが、吉田口の大沢に大雪崩れが出て、雪積季登山訓練のため幕営をしていて、多勢の若い人々の犠牲が出て以来、この計画はとりやめになつ

た。しかるに、オリンピック冬季大会で猪谷選手が二位となるや、再びスキーに関心を持つ人々が年々多くなつて来たため、正しいスキーの普及が必要と思われて来たので、昨年より講習会として東京支部の行事の一つとした。

それで、昨年の山田温泉での講習会に比較して、今回はその三倍の人員であつたので、何よりもまず怪我人を出さぬことを第一にして、講習の日程を進めることにした。これは山での種々な講習会でも言えることで、その成否は一にかかつてこの点にあるからである。怪我人は講習時間中にはほとんどなく、それが終つて自由に滑つてゐる時に多い。講習で一日中制約された時間に拘束されているため、自由な時間を慾する気持はよく判るが、多勢をあげつてい

かである。第三には、技術の向上である。スキー技術の目標というものを考へて見ると、誰もが一般程度を目指すことと思う。私も、早く上達をして頂きたいと思つてゐる。それには、身につけた技術の向上を望みたいのだが、これは一回の参加では無理である。直滑降も、ボーゲンも安定して出来ると思つていても、なかなかその技術は身につくものではない。こころみに友達を誘つて出かけて見るとよくわかる。必ずこんなはずではなかつたと思うのである。では、確つかりと技術を身につけるためには、どうすればよいかというと、それはたゆまぬ努力と、「素直」さである。この素直な気持でスキーイングすることが、最も大切なことであろう。

今回の講習会に、講師として御協力下さつた野田、関口、佐藤の諸氏に心からその労を謝し、厚くお礼を申し上げます。

最後に、雪積多量のためとはいへ、バス運行に不手際な点のあつたことは深く陳謝する。

粉雪の西吾妻

(一月一日—一月四日)

去年の夏栗駒山に登つて以来、東北の山への親しみが沸いて、常に遠い存在だつたみちのくの山々が、さして遠いという感念がなくなり、秋にはまた米沢市の招待で、村井米子さんと御一緒に、仙

鉄の登坂氏の案内により、西吾妻縦走の機会を得た。

その時白布高湯の冬について色話を聞き、バスが温泉まで冬でも入るから、是非と言うことだつたので、豊かな温泉と、素朴な宿が好印象だつたので、スキー合宿を計画した。遠い場所なので大した参加者も無いと思つていたら、なんと五十名を超える大人数となり、行く時はまちまちだつたが一日は高湯始まつて以来の冬のスキー客で、西屋旅館ではてんてこ舞いの状態で、村の娘さんを動員してのサビバスだったが、食事やおむすびが時間にまにあわない程だつた。

白布高湯にはゲレンデは無いが各地に雪が少くない情報を受けていたので、心配していたところ、四〇分程登つた所に川と道とはさまれた狭い斜面を見つけて急作りのスキー場が出来上つて、高湯始のゲレンデが作られた。

第三日目は小野川に雪が無く他のスキー講習会の人達が五台のバスで大抵してゲレンデはお砂糖に凝がついたような状態となり、とうとう翌日は硫黄鉱山まで登つてすべることになった。

シールをつけた人達十名程は、雪煙の中を西吾妻人形石へ登り、樹氷帯まで入つて粉雪の快味を知つた。吾妻の冬の雪の良さは素晴しい。飯豊や蔵王の銀嶺が真白に輝く姿は、見馴れぬ山なみながらその大らかさに心うたれた。

信夫高湯から五色のあたりは相当スキーヤーが入るようだが、この白布高湯側からのスキー客は今まで非常に少なく、今年始めての

賑わいとは、ごつた返すスキー場から見れば全く不思議な程である。

米沢市が蔵王の樹氷より立派である、西吾妻の山スキーの魅力を書真で紹介しているが、交通の不便や、設備の無い点が今までの難点だったが、受入設備が出来て、硫黄鉱山あたりまでリフトでもできれば、絶対に近い将来、新スキー場として、発展は疑いなしと思う。

米沢からバスで冬は一、二〇分、宿屋は東屋、中屋、西屋の三軒、何れも構造の同じ石造りの湯場が雪の中に湯煙りをあげている。(一泊五、六百元)

(坂倉登喜子)

木曾御岳山

(十二月三十一日—一月四日)

正月休みだけをフルに利用して行けて、静かで、一応雪山気分も味わえる所という虫の良い考えではなかなか計画も決まらず、十二月半ばになってやつと木曾の御岳さんというところに到着き、出発したのは三十一日の午後だった。丁度同じようなことを考えていた東京支部中島氏のパーティと合流し、阪大の後輩を誘ったりして総員八名、黒沢口七合あたりの無人小屋に入るつもりでツェルト、マ

ット等かなりの重装備で雪景色の赤岩須から林立する石塔を縫って歩き始めた。四合附近からスキーをつけ、ちらちら降り出した雪にまだ時間は早かったけれど六合小屋でストップ、冬は無人と思いこんでいた小屋には乾燥室から炬燵

まで用意してあるのには嬉しいような拍子ぬけのような気持ちだった。翌二日(曇)頂上往復すべく夜明けと共に一尺余の新雪を踏んで出発したが、森林帯を出る頃より次第に強まった風は稜線近くから息つく間のない突風の連続となり、ピッケルで確保したまま殆んど目もあけられない雪煙に、頂上直下のコルで引返した。三日(晴後雪)前日のラッセルのお蔭で快調に八合目に到り、晴れ上った稜線にはまだ相当雪煙が立つていたが、風

でしまった雪にアイゼンを気持ちよくきかせて頂上に立つた。寒さに顔中こわばらせながら三十分余四方の景観に心を奪われ、やつと下り始める頃は早くも濃霧が吹き寄せられて、昼すぎ小屋に着いた時は雪模様となった。勿体ない程の粉雪につられて五合目あたりまで滑つてみたり、楽しい日であつた。四日は撤収、昨夜から降り続く深雪に、スキーの進行は各人各様、雪だるまよろしく四合目でスキーをぬいだ時は安心の吐息をついた。

お正月というのにわれわれの他には登山者も少く、冒頭の念願はどうやら叶えられたという次第でした。(参加者・三枝、山口、大貫)

会務報告

△一月七日 会員懇談会

お正月休みの冬山とスキーの報告を主に会員の懇談会をルームで開いた。

△一月二十一日 理事会

議題 八子カ峰スキー講習会報告(野田、安彦)

二月の懇談会を会員のスライド観賞会と決定した。次号会報に八子カ峰スキー報告原稿を依頼した。

△一月二十九日 婦人の集い

「冬山報告会とスライドの夕」新年初登山の報告と、東京支部例会山行で行った鳥海山のスライド(中島撮影)を映写して、冬山報告及八子カ峰スキー講習会の報告を聞いた。

毎月第四木曜日を婦人の集いとしてあるが、今回は都合により

第四木に変更した。

◆会員の皆様へ 毎月第一水曜日は会報がおくれている通知がでない場合は、お葉書で、会員懇談会のお知らせをしておりますが、今後はその都度、支部の皆様にお出しする、非常に事務的なもので、郵送の関係から大変なもので、特別の時以外は第一水曜日の通知がなくても、お集り下さるようお願い致します。

会員集いで山行計画や、集会のテーマなど、皆様の御希望をお聞きして計画して行きたいと思っております。懇談会には多数御出席をお待ち致しております。(集会係)

図書紹介

The Mountain World

1958/59

Swiss Foundation for Alpine Research

一九五三年号以降刊行されてい

る本書は、今回で五冊目。相変らず写真の印刷は極めて美しく、本としての出来栄も羨ましいほど見事である。

①グルトナールの巻頭言を見ると、ガシヤープルム第2峰やブロード・ピークでは、軽遠征隊や規則ばらない陣だてでそれぞれ成功したが、一方横有恒氏は古典的な戦法を展開してマナスルを撃ちとつたというような意味のことが書かれている。日本のマナスル登頂が、外人の目から見ても隙のない正攻法であつたことがわかる。

本書のなかでヒマラヤ関係はガシヤープルム第2峰(F・モラヴェック)ブロード・ピーク(チョゴリザ(K・ディムベルガー)バラ・シグリー(F・デラニー)、マチャプチャリ(W・ノイス)、マナスル登頂一九五二(六(横有恒)第一登頂隊(今西寿雄)などが主なもの。マナスルには十五頁がさかれ、写真は三頁大の頂上、第一キャンプからのマナスル、第五キャンプの夕景の三葉が収められている。

そのほかにはウアガルンチョー(M・ウェストマコット)、ネヴァード・シリシエンカ(H・クリリア)、コルディエナ・ブランカ(G・ハウザー)などの記録的な登山記と、モン・ブランやアイガーの記事が載せられている。

写真が素晴らしいのは毎号のことだが、本号に収載されているのは前記マナスルのものを含め五十二葉の多きに達している。なかでもモン・ブランを四つの方角から撮影した四枚、アイガー北壁の二枚続き、シリシエンカ登攀の数葉

やアルパマヨ、ブロード・ピーク山頂の夕景、チョゴリザのH・ブルのシニブルなどは特に種類の意味で印象に残るものであつた。マナスル頂上写真もこれらに伍して毫もひけをとらないものであるの言うまでもない。

近年漸増の傾向にある邦人の海外遠征の記録が、国際的なこうした書物に掲げられることは、まことに結構なことである。アレナレスやチョゴリザの記録が本書の次号に収められることを希望してやまない。約B版二〇八頁、地図六面、二十五志。(T・M)

Alpine Journal

Vol. LXV May 1958 No. 296

AC百年祭記念号のあとをうけた本号は一五五頁の普通の厚さに戻つた。巻頭には最近物故したG・W・ヤングの An Alpine Aura と題する一文(一九五七年十二月十日の百年祭大会の時の講演)があるが、その最後に副会長のA・ツリヒャーがこんなことを付加えている。「私は二十五年間もヨーゼフ・クヌーベルと山登りをしたが、谷間でも丘の上でも高山の頂きでも、われわれの会話はヘル・ヤング(クヌーベルは必ずヘルをつけて呼んだ)に及ぶことが非常に多かった。クヌーベルはヤングを最良のアマチュア・クライマーと考えていたのだが、ある時私がクヌーベルにたずねると、彼は躊躇することなく「Mr. Young was just as good in the mountains as I ever was.」と言つたが、この言葉こそおそらく世界の

最も著名なガイドの一人が口にした最も素晴らしい賛辞だったろう。ヤング亡き今日、読みすてにできない一節であろう。

次はケンブリッジ隊のブマシロ紀行(アンデス)、マイヤールの南部グリーンランド(仏文)などが主なもので、あとはAC百年祭の諸行事の記事に五〇頁ほどが占められている。百年祭晩餐会の写真のなかには会長ハントと握手をしている横さんの写真もある。そのほか日本に関するものでは、木原博士編纂の『Peoples of Nepal Himalaya. Vol. III of Scientific Results of the Japanese Expeditions, 1952-53.』が書評欄にやり上げられている。

最後にアルパイン・ノーツ欄を一瞥すると、中央アジアやカラコラムの探検家としてわれわれにも親しい名の、R.C.F.・ショーンバークが昨年七十八才の高令で亡くなったことなどが目につく。(T・M)

Alpine Journal

Vol. LXIII Nov. 1958 No 297

ラカポシの登頂(F・R・ブルック)、マシヤープルム一九五七年(ウォルムスリー)、一九五七年のカラコラム遠征(E・シブトン)と並べただけで、どれもこれも読みごたえがありそうに思われる。それに中共のミニ・コンカの第二登頂と、A・ボリアコフのソ連隊による七千米峰の初登頂の二寄稿が載せられている。

本号に収められた中央エルブルズの大形折込み地図(十万分の

一)は見事な出来で、印刷も美しい。

イン・メモリアムには名誉会員R・W・ロイド氏(一八六八—一九五八年)の追憶が六頁にわたって述べられている。またアルパイン・ノーツ欄には著名なドイツの登山家ハンス・ブハーンが昨年一月八十五才で他界したことが出ている。ブハーンはアルプスで数々の登攀を行ったほか、一九〇三年にウシュバの双峰の初トラバースをやり、また一九〇二年にはメルツバッヘルに從つて天山山脈へ行き、ポリビアン・アンデスのイランプーの初登山を成遂げた経歴の持主であった。チリとの合同遠征である日本のパタゴニア(アレナレス登頂)についても数行が費やされている。

そのほか興味深く読んだのはイギリス隊(ハント隊長)のカフカズ遠征(一九五八年)の概要である。いずれ詳しい報告に接しられると思うが、本号には二頁足らずの速報がハントによつて寄せられていた。本文二〇頁、写真二葉。(T・M)

大氷河を行く

南米チリ・パタゴニア探検

田中 薫編

一九三二年の十二月から翌三年四月にわたつて行われた、わが神戸大学山岳会とチリ山岳協会との合同登山の模様を、隊長の田中薫氏がまとめたのが本書である。常時新聞紙上で報ぜられたようにこの隊はパタゴニアの未登峰アレナレス(三四三七米)の登頂に成

功したのだが、この山のアップローチの悪さが、本書には刺すところなく伝えられていて、登頂の喜びもそれだけに大きかったことと想像されるのである。また、英米とかフランスとベルギーなどのようにに近しい民族同志の場合はいざしらず、一般に他国民との合同登山は成功がむずかしいとされているのに、初めてチリ人と隊を組んだ日本人が、よく所期の目的を達し得たのは、リーダーに田中氏とかが登攀隊長に高木氏のような国際人を得たことが大きな要因ではなかったらうか。

本書の登攀の部分は高木氏が、その他の紀行は田中氏が執筆しているが、共に面白く読むことができた。この隊に加わつた依田孝喜氏のすぐれた写真が大小七十七枚も巻頭に収められたことは本書の価値を高めているし、巻末の折込地図やアレナレスへのコースを示す図版なども不足なく挿入されている。慾を言えば、厚表紙で本文の紙質をもつとよくした特製本を別に造つてもらいたかつたことである。この種のものはよく蔵しておきたいからだ。しかし、これだけ写真の多い本がかなり廉価で刊行された点は出版者もほめられていいと思う。

B6版二二頁 一九五八年十一月毎日新聞社発行 二六〇円(望月)

村木隊長らカルカッタ着

ヒマルチユリ登山隊村木次郎隊長と松田雄一隊員の二人は三月四日カルカッタに着、通関、シエルバなどの準備にとりかかつた。本隊は八日入港した。

登頂のすぐ後に ⑥

沼井 鐵太郎

ローツエ初登頂

世界第四位の高峰ローツエ(八五〇一米)は、一九五六年アルベルト・エグラーを隊長とするスイス隊の初登頂するところとなつたが(A・J・二九三三エグラーの報告、本篇エグレスト初登頂の項参照)、ここにエグラーの原著「ギップス・ユーパー・デン・ヴォルケン」から一九五七年ヒュ・メリックの英訳書「ザ・エグレスト・ローツエ・アドヴェンチュア」その他の資料により、例によつて登頂分析をやつてみる。

五月十八日ローツエ・フェース最上部第六キャンプから出発した登頂隊エルネスト・ライス及びフリッツ・ルフィンガーの二人は、寒風について急峻なローツエ・クローアールを登りつめて、双児峰間のギャップに着、六十度に乗んとするネグエに慎重なステップを切つて、左方(北方)の最高点に達した。キャンプを出て、毎分四リットルの酸素を補給しながら、六時間かかつたことになる。

ローツエの頂核はナイフの刃のように鋭く、東・南両面は物凄くそげていた。筆者のいわゆる点状峰の内でも最も典型的なものであつた(本篇初登頂の項参照)。

「二人は余り物をいわずなかつた。たとえようもない壮麗で荒削りな光景に余りにも圧倒されたのだつた。見晴しにとりかかる前にマスクを外し、アイス・アックスがしつかりささっているかどうかを確認

かめて、その上にリュックサックをひつかけた。絶嶺は誠に荒々しい形相で、腰をおろしたりリュックサックを置く余地などてなかつた。それで二人は尖頂の鋭稜に手をかけて、エグレストの巨大な南東面絶壁や、近くのローツエ最高部の岩尾根に氷の稜やひさしの膠着しているのを見ていた。寒かつたけれど、二人は手袋を脱いで、ネパールとスイスの旗をアイス・アックスに結びつけた。更にまたライスは、アックスの頭に彼等のマスコットである毛織の小猿をくつつけたのであつた。

世の常の初登頂の感動はここでは素人わかりするようには描写されていない。文字の上では、かえつて下の方、第三キャンプで午後二時半強烈な興奮が湧き起つたことを見出だす。その時、「ライスとルフィンガーが絶嶺下最後の峭壁上にあり、二十分後に正しく登頂したのをデイルが認めた。途端に第三キャンプでは喝采の波が重なり、シエルバ達もそれに巻きこまれていた。▲ローツエをやつた、ローツエをやつた」と叫び続ける。デイル達は絶叫しスカーフを振つてその歡喜を伝えた」とある。

さてまず思うことは、ローツエの登攀が彼れらの指摘した如くアルプスのモンテ・ローザのマリネリ・クローアールよりも峻しく、低高度でも人非常に困難な部類に入るのであり、また典型的な尖状の尖頂にへばりついているに加えて、風も強烈で、いささかの緊張もほぐすわけにゆかなかつた悪条件に基因して、登頂成就の満足

感は得たとしても、解放性安心感
は閃きもみせず、結局、歓喜の爆
発が圧縮固化され不発となつたの
ではなからうか。

果せる哉、本年十一月九月、ロ
ーツエ・エヴネレスト遠征隊々員
の医療班ロイトホルト (Leutho
r) 日本での名刺にはエドワルド
・イー・ライトル少尉と印刷し
てあつた) の講演を聞きスライド
を見るに及んで、疑念が氷解し
た。旗をつけたビッケルを持つて
頂上記念撮影に立つたライスの顔

には、たしかに静かながら笑みが
漂い、苦斗の果ての消耗表情はな
いようであつた。彼等ヴェテラン
は、目的のため第一義的に不要な
感情語句はゆとりのない立場の上
で整理単純化して登頂の事実を把
握し、忽ち次の段階に移行するよ
うになつたものと察せられる。ピ
ツケルのブレードでなくビッケル
の方に小猿の縫いぐるみが突きささ
つている写真は、きびしい登頂で
なおかつ余裕を示したものであり、
またかつベルンの駅頭で岩場
にあつて猿の如くあれかしと念じ
てそれを渡した愛妻への感謝と成
功の呼びかけ、つまりは登頂感激
の具体的推移形態とみて不可であ
らうか。

序でのことながら、スライドで
はネパールとスイスの国旗が右と
左に同じ高さにビッケルに結ばれ
ていた。今まで恐らくすべての登
頂記念旗の慣例ではビッケル軸に
そうて上下の順に列んでいたのに
比べて、甚だ特異な形式である。
この理由を講演者に尋ねたら、答
は知らないというだけだつた。し
かし彼は筆者の登頂分析研究(登

頂感激・慣習作法・行事の史的民
族的比較)に興味を感じているよ
うだつた。推察するに、ローツエ
頂上の旗ビッケルは、もし何ら特
別の意味がないとすれば、危険性
のあるその尖頂ではビッケルを出
来ただけかたなくネヴェにさしこ
み、登攀者は必然それを支えなが
ら旗紐を結ばざるを得なかつた。
したがつて通常の縦式旗配列より
も便宜的に横式旗配列を採用した
のかも知れない。

登頂記念旗についての推測は、
頂上で写真撮影のために直立の姿
勢をとるのが大変むづかしかつた
と書いてあることで一面裏書きさ
れているようだ。登頂者は精一
杯の登攀で疲れて弱かつたせいも
あつたろうが、そのちつぽけな立
場では動きがとれず、実際ちよつ
とでも動けば全く危険をばらん
だ行動となつたからである。撮影中
手袋を吹き飛ばされないようにす
ることが一番大切なことであつた
しかしこうして二人は四十五分間
滞頂していた。飛び過ぎる霧の絶
え間に、仲間が待つているであろ
うキャンプの幾つかをしかと見る
ことが出来た。ただそこへの下り
ははてしなく苦勞の多いものであ
ろうことが判り切つていた。酸素
吸入は頂上で尽きて容器はそこに
捨てたが、二人は防寒のためにま
たそのマスクをつけた。烈風は勢
いを増して彼等を襲い、手と足は
全然感覚を失つてしまつた。かく
て下山と二つたのである。(一九
五七・一二・二・稿)

原稿募集 会報の原稿を募集し
ます。研究、紀行、書評、随想何
んでもお寄せ下さい。

伊藤さんの憶い出

小林 義 正

伊藤さんが逝くなられたと聞い
て、ハツとした。そういえばここ
暫らく古書展でもお会いしていな
かつたし、去年の夏、深田さんの
ジュガール・ヒマール婦朝歓迎会
の帰途にも、心なしか元気が欠け
ていたようにお見受けした。

伊藤さんと私とお附合は、好
きな古本漁りがとりもつ不思議な
御縁に始まつた。書物に対して強
い執心をもつ老を探書のライバル
にもつことには、脅威を愛じた
が、間もなく探本をお互に知ら
せ合つたり、ときに戦果を語り、
他愛なく喜び合うという間柄にな
つた。

伊藤さんは若いころから、ずい
ぶん山を歩かれたようだが、自ら
決してそれを誇らしげに語るとい
う人ではなかつた。いつか話のつ
いでに九州から始めて、山陽、四
国、近畿、中部、東北から北海道
というふうに順序だてて登られた
山歴を伺つたことがある。勤務の
関係もあるらしいが、ちよつと珍
らしい登り方だと思つた。そして
一面ずいぶん逸話の持ち主でもあ
つた。カモシカが赤色にどんな反
応を示すかを験するため、動物園の
檻の前で赤い布を被つて踊つてみ
せ、見物人から笑われた話などに
その一端が窺える。専門は博物
学、特に植物を専攻されたが(東
京の植物を語る)昭和十年文啓社

南の山靴とスキー用品

登山とスキー行に一番主要な役目を
持つ山靴とスキー靴はミナミ独得の
技術最高の材料で作つたものをお奨
めします。

テント
スキーと山
の服装
キスリング
サブザツク

各種取揃



スポーツ用品

ミ ナ ミ

神田小川町中央角 TEL (29) 1359

㊟ T. S. FLAVOUR



楽しい登山に スポーツにノ
グット一杯美味しいジューズ
本品は水にもけやすく簡単に使用です。
一軒宛ポリメチレン袋に入っています。

土 谷 商 事

東京都杉並区大宮前6/340

登山用具の専門店

好日山荘

中央区銀座西二ノ丸
TEL 京橋(56) 3600



カワノ進呈

の著がある。動物、地質、民俗学方面にも造詣が深く、いつか書斎で「島」に関する文献とか、菅江真澄の足跡に関するものだけを示されたが、よく整理されていたことを記憶する。

そんなわけだから伊藤さんの山に関する古書の蒐集は間口が広く登山記録はもとより文芸、科学、宗教の分野にもおよび、常に実証を重けておられた。山といえば穂高か剣、谷川だけしか知らない、登らないというふうな行き方をする人とは、およそ対蹠的だったといえよう。

昭和廿四年十月十一日、金沢市の第一中学校の講演後、新潟へ帰郷されている高頭仁兵衛翁の寿像建設費の後援をしようと直江津駅から長岡駅に向い、来迎寺駅に下り立つたのは夜も遅い頃であつた。

高頭翁には到着時間を通知して無かつたので、同日は朝から待ちわびられた様子で、三度も駅へ出迎えに來られたと、駅前の西九旅館の主人に聞えて、お気毒でならなかつた。

十月十二日、早朝高頭翁を訪ね、昨日のことを話して、

山のことに移り、やがて越後支部が建設する翁の寿像のことに及ぶと、まだ五、六万円不足しているとのことであつた。よつて翁の御同行を願つて村の小学校に行き、かねて翁の知人の山岸義三氏に面会し、すぐに隣接敷地の中学校校長鈴木憲雄氏に訪問の旨を伝え、十

また、古い刊行書を自ら苦勞して蒐集、書物を愛すればこそ、心なき人から借覽を申込まれることを嫌われた。従つて、蔵書はすべて「門外不出」の立前をとられたが、本當の研究者にまで見せないというのではなく、見たい者はそれだけのエチケットを守り、写しとるだけの努力を払うべきだといふのが老の持論だつた。もつともなことと思う。

一昨年の五月、庭前のナンジャモンジャが美事な花をつけたから、ぜひ見にくるようとお誘いを受け、樹上一面に雪をおくよう

な美しさに驚いたことがある。昨年は何かの所用で花期に伺えなかつたところ、また知らせるからとのお約束だつたのに、いままじはその開花を待たずして逝かれた。悲しいことである。(一九五九・二月)

会務報告

一月役員総会二十四日(水)
▽場所 本会図書室
▽出席者 日高会長、松方副会長

会員計報

伊藤 隼氏(会員番号二二七一)

一月十三日心臓衰弱のため杉並区上萩窪二の三〇九の自宅で死去、七十五才。植物研究者として知られ「東京の植物を語る」の著書がある。一月十六日自宅で告別式が行われ本会から折井、太田、山崎各理事、小林義正会員らが参列した。

◆第一九〇回小集会 一月四日午後六時から日本山岳会ルームで佐々保雄氏の「シエラネバタの山旅」講演とスライド映写があつた。

◆第一九一回小集会 二月二日午後六時半から休協会議室でヒマルチュリ先遣隊報告並びに本隊準備報告があり、金坂先遣隊長(先遣隊報告)村木隊長(登山準備および計画概要)田辺隊長(装備)山野井隊長(食料)竹田隊長(各種実験報告)住吉隊長(酸素並に医療)木村隊長(写真)松田隊長(氣象)につきそれぞれ準備状況が報告され、質疑応答など興味深いものがあつた。

◆ヒマルチュリ登山隊歓送会 二月三日午後五時半から大手町永楽クラブで開催、日高会長以下多数会員出席して盛會であつた。なお石坂隊長撮影のスライドが上映された。

◆ヒマルチュリ登山隊出発 村木隊長以下のヒマルチュリ登山隊は二月十二日午後零時三十分東京駅発ハトで出発、同十五日朝神戸港よりサンゴラ号でカルカッタに向つた。

◆「富士」をみる会 東京支部では記録映画「富士」をみる会を三月下旬千代田区大手町富士銀行本店で開催する。定員は二百名、観賞希望者はルームへ申込みこと。

高頭翁の寿像(遺稿)

伊藤 隼

は声をかけて同行を求め三人となつた。校長は生憎他出中であつた。よつてその日に予定した講演をとりとめ、吉田氏の口添えで宿屋がないので学校の小料理屋に泊つた。夜は同校の先生が来訪、苗場山の話で始終した。

十月十三日、校長に面会し、午後新潟市を後にした。

十月十四日、この朝、高頭翁や越後支部の藤島氏に別れを告げて

越後支部の藤島氏に別れを告げて

お知らせ 本事務員佐藤範子氏は今回都合で辞任、後任として石原正子氏が勤務される。

会報総目録正誤表

一五一一二〇〇号

一頁四段三〇行 駒ヶ岳小屋の五週年記念と訂正
 同頁同段三八及び三九行の間に屋久島べつ見 古沢肇 一七五と挿入
 二頁二段七行 笠ガ岳と訂正
 同頁同段二七行 ピラミッド・ピクと訂正
 同頁同段最終行 ボンベイと訂正
 三頁一段六行 活躍と訂正
 同頁三段二行 登山規則と訂正
 同頁同段一―一二行 一九八・一九九と訂正
 同頁同段二三行 行を前と訂正
 四頁一段一七行 織内信彦と訂正
 同頁二段一八行 恵那山と訂正
 同頁同段一九行 一七一と訂正
 同頁同段二二行 恵那山と訂正
 同頁同段二七行 末丈岳と訂正
 五頁三段一五行 に眠ると訂正
 同頁同段最終行から二行 Handbook と訂正
 六頁四段二三行 Nepal と訂正
 七頁一段一四行 国山岳会と訂正
 同頁三段一九行 百年祭と訂正
 八頁一段二八行 役員総会と訂正
 同頁同段三四行 理事会と訂正
 同頁二段二四行 一六二と訂正
 九頁二段二二行 先遣隊と訂正
 同頁四段一行 一九四を削除し折込通知によると訂正
 一〇頁三段一五行 ガルツェンと訂正
 同頁四段八行 メツ・セージと訂正
 一一頁三段最終行 名誉会員と訂正

正

同頁四段二三行 Atmospheric と訂正

一二頁四段一二行 変転と訂正

(・印訂正箇所。以上原稿作製者の立場で訂正した。なお間違いがあつたら御遠慮なくお知らせ願いたい。―沼井)

昭和三十四年三月廿五日発行

東京都千代田区
神田駿河台四ノ六

発行所 法人 日本山岳会
編集者 山崎 安治

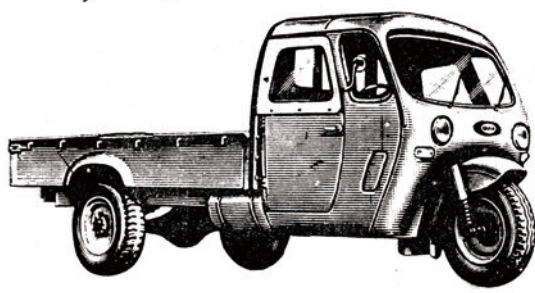
頒価二十円 電話神田(25)八九五二番
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地

NYLON TENT
SKI & MOUNTAIN GOODS

SUDACHO. KANDA. TEL (25) 6428

ゆったりした3人掛の運転席



乗用車と間違わないで下さい。3輪車でこんなにゆったりしているのです。しかも軽い丸ハンドルですから、長距離輸送でも疲れません。

- ・アンダーフロアエンジン
- ・オーバーヘッドバルブ
- ・AB型2屯積

他に1屯車の決定版とご好評を頂いておりますTR型がございます。

山なら絶対!!

オリエント

Hino 日野ディーゼル

も寄りの地区販売会社でご用命をお待ちしております